



大田祐介 (福山市議会議員)

河口堰のヘドロ

瀬戸内海に大きな異変が生じている。魚介類の不漁に加えて牡蠣の大量死が発生した。芦田川河口堰に責任は無いのだろうか。芦田川の淡水と海水が混ざり合う汽水域が消失して約半世紀、汽水域の持つ能力について、秋田県の八郎潟の例を紹介したい。

日本最大の汽水湖だった八郎潟は、元々はワカサギやシジミなどの漁業が盛んだったが、1960年代に海を堰き止め干拓して大部分が農地となり、車の車輪に例えればホイールの部分が農地、タイヤの部分が淡水湖となつた。結果、漁業はすっかり衰退した。ところが1987年の秋、台風により海水が湖内に流入し、その際にシジミの稚貝が大発生した！1990年にシジミの漁獲高は一万トンとなり、仮にキロ100円としても1億円の水揚げだ。これは汽水域の能力が証明された例と言える。このように多くの生物を育

側に行つて見ると潮が引いた竹ヶ端の海底は真黒なヘドロで覆われていた。広島大学の山本民次名誉教授は、牡蠣の大量死の原因是海底のヘドロから発生した硫化水素が貧酸素水塊を作り、それによる酸欠であるとデータを元に説明している。

また、河口堰が閉まつてることにより、上流から流れてくる土砂が神島橋から草戸大橋にかけて大量に堆積している。中洲が成長し、川床も上昇してまるで天井川だ。これを解消するために国土交通省が浚渫しているが、その量なんと8万m³。この砂も本来なら自然流下して瀬戸内海の中、今こそ河口堰の開放に向けて検討を始める時と感じる。

瀬戸内海の環境が激変する中、底質の改善に寄与したはずだ。瀬戸内海の環境が激変する中、今こそ河口堰の開放に向けて検討を始める時と感じる。

堆積したヘドロも大金を投じて浚渫するより、汽水域の持つ自然の力で分解するのが良い。工業用水の問題、塩害発生の可能性、ハードルはあるがこのままでは手遅れになる。